國學院大學学術情報リポジトリ

1902年のフランス社会党Parti socialiste francais 第4回トゥール全体大会とフランス社会党PSFの創立 : フランス社会党右派PSFとジャン・ジョレース

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 横山, 謙一
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001650

1902年のフランス社会党 Parti socialiste français 第４回トゥール全体大会とフランス社会党 PSF の創立
―― フランス社会党右派 PSF とジャン・ジョレース ――

横　山　謙　一

前回の補遺

前回の「國學院法學論叢第50輯」に掲載した「1901年のリヨン大会 Congrès de Lyon（第３回フランス社会主義諸組織全体大会 Troisième Congrès général des organisations socialistes français）とジャン・ジョレース　1901年のジャン・ジョレースとフランス社会主義運動――後篇：リヨン大会第２日第１回全体会議から第２全体会議と委員会まで――」「第３章　諸議案を検討する委員会」と「結びとして」の間に「第４章　大会第３日」を挿入する。

「第４章　大会第３日

大会はブランキ派と共産主義同盟の委員会からの退場によって続行不能になったかに見えたが、翌日の全５月27日の体会議に２つの党派ヴァイアン派＝革命社会党と共産主義同盟の代議員はの代議員は出席した。第１回全体会議はコリー議長の司会のもとに９時に開始された。

もと入閣支持派のリーダーであったブリアンはかつてのミルラン入閣支持派の立場をかなぐりすてて、入閣反対派が使ってきたミルランはどの党派にも属さないのであるから入閣は個人的責任とイニシアティヴでおこなわれたとする論理を逆手にとって、ミルラン入閣派統一の阻害要因になっていないと主張する。かくしてヴァイアン派に支持されるドゥラポルト動議を少数派に追い込み、ミルランを擁護することが出来た。ブリアンの雄弁と狡猾な論理が力を発揮したのである。

一方ドゥラポルトは「ミルランは党の外部にある」を「ミルランは党の

コントロールの外部にある」と言い換え、「入閣主義でも反入閣主義でもない」と主張するブリアン動議の矛盾を突く。

最終的にはヴァイアン派が支持するドゥラポルト動議を第２回全体会議開始直後に賛成286票対反対910票の圧倒的多数で否決され[(1)]、ヴァイアン派＝革命的社会党と同派に近い小党派共産主義同盟、いくつかの自律県連合は退場して、今後1905年４月のパリ・グローブ統一社会党創立大会まで２つの社会党の時代は続く。この大会の最後に新しい党組織についての規約が可決されたが、リヨン大会が実質的統一を勝ち取れなかったことに対する不満がアルマーヌ派＝革命的社会主義労働者党 POSR や統一を期待して会場に残った自律県連合の代議員から表明された。」

はじめに

1901年の第３回フランス社会主義組織全体リヨン大会 Troisième congrès général des organisationssocialistes tenu à Lyon でのヴァイアン派のフランス社会主義運動統一維持の最終的試みも失敗し、フランスには２つの社会主義政党が創られる。一つはミルランのヴァルデク－ルソー内閣への入閣に反対し革命的理論に固執するフランス社会党 Parti socialiste de France（PSDF）（以下、社会党左派と記す）であり、もう一つはミルラン入閣を支持しより改良主義的路線を選択した社会党 Parti socialiste français（PSF）である。

前者はマルクス主義理論を信奉するゲード派＝フランス労働党Parti ouvrier franâis とブランキ主義の伝統をくみながら近代的革命的社会主義政党に脱皮した革命的社会党 Parti socialiste révolutionnaire（ヴァイアン派）の２政党（厳密に言えばアルマーヌ派＝PSOR から分裂して革命社会党の傘下に入った小党派である共産主義連合も数えることが出来る）から構成される。1902年９月26－28日にアリエ Allier 県のコマントリー Commentry で創立大会を開催した。そして11月３日にイヴリ−シュル−セーヌ Ivry-sur-Seine で協議会 conférénce を開き、党の組織的枠組みを創り上げた[(2)]。ト

ゥールで開催された大会は事実上のフランス社会党 Parti socialiste français 創立大会であったが、３つの社会主義全体大会を継承しているという意味を込めてフランス社会党第４回全体大会とは名乗った。しかしフランス社会主義諸組織 organisations socialistes français という名称はとらずに、ジョレースやブリアンを中心とする新党の名称を名乗った。

一方ミルラン入閣支持の改良主義政党であった社会党 Parti socialiste français（PSF）（以下、社会党右派と記す）はジョレース、ブリアン、ヴィヴィアニらの独立社会主義者とフランス社会主義労働者同盟 Fédération des travailleurs socialistes de France（FTSF）＝ブルース派と革命的社会主義労働者党 Parti ouvrier socialiste révolutionnaire（POSR）＝アルマーヌ派の三者から構成される。しかしゲード-ヴァイアン派に不満のセーヌ県連、パード-カレー県連、セーヌ-エ-オワーズ県連などの自律県連合の左派グループも左右両派の和解を期待しながら社会党右派 PSF 側に加わった。(3)

第１章　フランス社会党 Parti socialiste français 第４回トゥール全体大会第１日

第１節　リヨン大会での分裂後のフランス社会党右派 PSF とフランス社会党 PSDF

フランス社会党 Parti socialiste français 第４回トゥール全体大会議事録には政治綱領と経済綱領25か条を付加した「諸原則の宣言 Déclaration de Principes」全体委員会案といくつかの県連合から提案された「諸原則の宣言 Déclaration de Principes」修正案が掲げられている。原案と修正案には類似した部分も多く見受けられるが、決定的な相違は修正案には原案での選挙への参加と政治的経済的改良の推進ではなく、解放の手段として「ゼネラル・ストライキ」が掲げられている点(4)である。さらに政治綱領と経済綱領のかわりに「社会党はいちかばちかの政治をしりぞけ、今から実現を推し進める改革の綱領を有する」(5)とする短文の「改良綱領」が末尾を

飾っていた。大会第3日目の第3全体大会でこれらの「宣言」「綱領」が審議・採決されるがその際ミルランが訪仏したロシア皇帝＝ツァーリのレセプションに参加したことをめぐり紛糾する。この展開の詳細は後で詳しく述べる。

ところでリヨン第3回フランス社会主義諸組織全体大会Troisième Congrès général des Organisations socialistes français 第3日第2回全体会議開始直後に、ミルランの除名と党の統一、すなわちゲード派＝フランス労働党との和解をもとめるブランキ派＝革命社会党 PSR ドゥ・ラ・ポルト決議案が否決されたあとで、ブランキ派＝革命的社会党と傘下の共産主義同盟、そしていくつかの自律県連合は大会会場から退場した。(6)

しかし残ったいくつかの県連合とアルマーヌ派から、ミルランは自ら党を出たことを確認し、社会党の統一をはかることをもとめる発言が多く出され、紛糾した。リヨン大会を継承しているという意味でトゥールでのフランス社会党 PSF 創立大会は第4回トゥール全体大会と名乗ったことは既に述べた。

一方ゲード派＝フランス労働党 POF とヴァイアン派＝革命的社会党 PSR などの入閣反対派はフランス社会党左派 PSDF 第1回全国大会と名乗った。党執行部の名称はフランス社会党右派 PSF が党組織の自律性を一定認める執行部機関という意味を込めて「全体委員会 comité général」と称したのに対し、フランス社会党左派 PSDF の方は党全体のコントロールを担う機関という意味で「中央委員会 comité central」(7)と称した。後者の党組織構造はゲード派＝労働党 PSF のそれをおおよそひきついだ。

フランス社会党右派 PSF トゥール大会は1902年3月2日から3月4日までの3日間、トゥール市の市役所 Hôtel de Ville で開催された。トゥール市はフランス中央部 Centre アンドル−エ−ロワール Indre-et-Loire 県の県庁所在都市である。この県はもともと保守的な政治風土があったとこの県で生まれた作家のバルザックが述べているが、第3共和政のもとで急進派に、ついで急進社会主義派が勢力を伸ばし、両大戦間の1930年代に2度

首相となったカミーユ・ショータン Camille CHAUTEMPS を排出したが、第３共和政期には社会党の地盤になったことはない[8]。

第２節　３月２日日曜日第１日第１回全体会議

大会は５時ちょうどに開始された。議長はクロゼル CLAUSEL[9]、副議長はルノー RENAUD[10] とガコン GACON[11]、書記はレヴェリヤル RÉVEILLARD[12] が指名された。

議長は最初に委任状審査をして、に審査報告をするように組織委員会委員長のボヌヴィアル BONNEVIAL[13] にもとめた。大会組織委員会を代表してボヌヴィルから報告がなされる。

報告によれば、有効な委任数のうち、多い順から列挙すれば、

セーヌ県連合　21委任　アルデンヌ県連合　12委任
ノール、パード-カレー県連合　11委任　ローヌ県連合　９委任
ジロンド県連合、フランス社会主義労働者連盟、ガール県連合　８委任
タルン県連合、エーヌ県連合、アンジュ-ポワトゥ-ヴァンデ県連合　７委任

となり、パリ市のあるセーヌ県および周辺県（セーヌ-エ-オワーズ県、セーヌ-アンフェイウール）の県連合が多く、次いでジロンド県、ガール県、ヴォクリューズ県、タルン県などの南仏の委任数が多い。

セーヌ県および周辺県の県連合は伝統的に独立社会主義派やポシビリスト（フランス社会主義労働者連合）が地盤としており、南仏はゲード派から自律県連合へと移行した県が多く、タルン県はジャン・ジョレースの、アルデンヌ県はアルマーヌ派の拠点であった。

最後に、やがて統一後に若い統一社会党の人材として注目される２人の指導者が基盤とした県連合が２つあった。一つはピエール・ルノーデル Pierre RENAUDEL[14] のセーヌ-アンフェリウール県連合（５委任）であり、もうひとつはギュスタヴ・エルヴェ Gustave HÉRVÉ[15] のヨンヌ Yonne 県連合（２委任）である。前者はジョレース暗殺直前まで行動をともにしたルノ

ーデルであり、後者は彼の過激主義を庇ってきたとしてジョレースが非難される理由をつくったエルヴェである。

大会全体会議の冒頭ではブルターニュ地方の複数の県連合を糾合したブルターニュ連合が党費を党中央の全体委員会に支払わないにもかかわらず、特別にシャルル・ブリュネリエル Charles BRUNELLIÈRE[16] とイヴ・ルフェーヴル Yves LE FEVRE[17] の 2 人を代表として参加させるか否かについての議論に多くの時間が費やされる。この事件はフランス社会党右派 PSF が、たといブルターニュ県連合に複雑な内部事情を抱えていたとはいえ、いかに党規律が確立されておらず、党としての組織が未熟であったかを物語っているといえよう。

ブルターニュ連合が党にとって微妙な問題を含んでいることを察知していたセーヌ-アンフェリウール県の代議員ルノーデルは、発言は認めるべきであるが、票決は認めるべきではないという折衷的な案を提案する。

同じ県連のバジル BAZIRE は党費を払わずに大会に参加すれば悪い前例となる、自分の県連も同じ様に選挙の資金に事欠いていると反論した。

ジョレースはブルターニュ連合を弁護して次のように発言した。

「充分にプロパガンダを行わなかったという全体委員会に向けられた叱責を支持しようとは考えません。私たちが検討してかならず行き当たるのはまったくむつかしい問題であります。私が焦点を当てたいのは単に党員証の問題であります。まずはわれらの仲間であるルフェーヴルが提起した議論を個人的感情 une susceptibilité personnelle を入り込ませてこじらせないようにすることをのぞみます。ブルターニュのいくつかのグループの名のもとに問題を提起したのであるから、提案がいくつかの抵抗にあったからといって、無駄にはならないという希望をいだいて、すなわちブルターニュ連合をここに引き留めるという希望を持って、最後まで議論を続けることを認めるべきであります。私としては、実は不規則性や規律違反の前例を作り出すことは残念なことであります。この点についてはきわめてはっきりと断言することで、私たちが今日の事柄が前例としての性格をと

らないように出来るでしょう。

しかし人が気づいていない、そして私たちの仲間であるルフェーヴル自身が個人的不満を引き起こすことをおそれて、曖昧な暗示しかしていない２つの点について大会参加の仲間が気にとめるようにもとめます。ブルターニュに特有な２つのことがらとは、第１にブルターニュが最も広い連合の一つであり、多数の県へと広がっているからであり、その結果限られた広さの他の県連合よりもより難しいのであり、小さな不一致にも即座に必要な合意をとることに困難が生じるのであります。[18]」

そしてジョレースは続ける。ブルターニュ連合にはまったく自立的なグループと（党中央の）全体委員会に属するグループがあり、デリケートな問題に直面している、そしてブルターニュ連合と全体委員会から離脱したばかりの全国組織（社会党左派 PSDF）に同時に加盟するグループとの団結を維持することが問題となっているが､それを解決する時間がないため、個人的で非公式の代議員を出さざるを得なくなっているが、やがて公式の関係が結ばれるあかしであるから委任を有効と認めるべきだとジョレースはいう。[19]

彼に続きアルマーヌ派＝革命的労働者党 PSOR のアムラン HAMELIN[20]も元独立社会主義派のブリアン BRIAND[21]もブルターニュ連合の特殊な事情を鑑み、そして将来の関係の発展を希望してブルターニュ連合に同情的立場を示した。

最終的にはブルターニュ連合の大会参加を認める案は、ジョレース-ブリアン提案として議決され、反対６票を除く全体一致で可決された。[22]ついでに党費を払っていなかったアルデッシュ－ドローム県連合の参加も認められた。

セーヌ県連については、元ブーランジェ主義ナショナリストとして議員となったクロヴィス・ユーグ Clauvis HUGUES を代議員として認めるべきかがあらそわれ、認められなかった。オワーズ県連については代議員のパルソン PARSONS が数日中の党費支払いを約束して１委任が認められ

た。

委任状審査や議事手続きについての議論に終始して、なかなか政治方針や政策綱領についての議論に入れないままに初日の第１回全体会議は解散する。難敵が去って、心が通じる内輪の大会となり、緊張感が消え失せたかのようである。

第３節　３月２日日曜日第１日第２回全体会議

議長など大会事務局は任務を継続した。全体会議が開催されると、いきなりガブリエル・ドゥヴィルが政策綱領の議論に入る。それも政策綱領の原案のうち「経済綱領」を次から次へとやり玉に挙げ、身もふたもないほどに徹底的に批判するのである。ゲード派やヴァイアン派にとどまらず、社会党右派 PSF にも以前残存している教条的理論に対し、かねてよりきわめて批判的なドゥヴィルが不満を爆発させた形となった発言である。

ドゥヴィルはまず「諸原理の宣言 la déclaration de principes」においてフランス革命から社会主義が誕生してその民主主義的成果を受け継いだのであると強調した。また二つの階級にすでに分解しているとする理解にもカウツキーを引用して批判する。いまだ大きな中産階級が存在しているというのである。ドゥヴィルは資本主義社会ではブルジョアジーとプロレタリアートの二つの階級に階層分解するという理論を硬直して理解している社会主義者たちを痛烈に批判したかったのである。

批判の二の矢は軍事費に向けられる。「あらゆる軍事費と海軍の費用を廃棄する」という箇所について「国民の防衛であると正当化できない」と書き加えるべきであると主張する。侵略の場合の防衛をも考慮するべきであるとする。さらに「社会党は労働者が選挙に参加するだけでなく、大々的集団的努力を、継続的で整然とした革命的行動を準備する」とする条項のなかで「革命的 révolutionnaire」という語を問題とした。「革命的」という語が曖昧であるから削除するか、一歩譲っても革命という語の意味を明確化して使うべきではないかというのである。暴力的な意味での革命に

ついて問題にしているのである。この箇所の彼の発言はメートロンの「労働運動人名辞典」の彼に関する項目でも例外的に詳しく取り上げられている。[23]

当面の要求である「経済的要求」については、ドゥヴィルは事細かに批判をする。第４条の「離婚法の改定」はどう改訂するのかが示されていないとか、第７条で常備軍の廃止をインターナショナル大会の決定に基づくとしているがその大会はロンドン大会であると明示するべきであると、第14条の「家内労働の立法化」は「家内労働の法的規制」にするべきであるとか、第15条の「労働災害についての法律の雇用者の責任による改良と改善」を「（労働災害の）全案件についての雇用者の強制的保障」と改めるべきであるとか事細かである。彼は「政治綱領」と「経済綱領」の問題点を逐条批判した。

ここでかつてはゲード派の理論的指導者として見られてきたドゥヴィルの波瀾の多い経歴を振り返ることによって、この大会での批判者に変貌した過程を探りたい。

第二共和政時代の著名な議員を祖父に持つガブリエル・ドゥヴィルは1854年にフランス南西部のオート-ピレネー県のタルブ市に生まれ、トゥルーズとパリで法学を学び、法学士の学位をとって弁護士となった。学業に才能を示し、強い意欲を示したドゥヴィルはそして1883年にはマルクスの「資本論」要約版を上梓し古典的翻訳として評価を受ける。1888年にはバルザックについての文学評論についても才能を示す。さらに1904年には後生から高い評価を受ける「社会主義者のフランス革命史：テルミドル期と総裁政府期」を書きあらわし歴史についても業績をのこした。

彼はゲード派を離脱する以前にも、決して一貫した同派の活動家・理論家ではなかった。1877年にゲードの「エガリテ L'Égalité（平等）」紙の主要な共同執筆者を引き受けながらも、反逆の作家ジュール・ヴァレス Jules VALLÈS「ル・クリ・デュ・プープル Le Cri du peuple（民衆の叫び）」など異なった党派の社会主義派の新聞にも執筆した。1876年には法学者の

独立社会主義者エミール・アコラスを支持して選挙をたたかい、さらには1879年には獄中にいたブランキの選挙戦をたたかった。1896年の補欠選挙ではパリⅣ区から独立社会主義者として出馬して当選している。また1889年にはフランス労働党の全国委員会と党自体を離脱している。そして1903年には補欠選挙ではナショナリストで著名な作家であるモーリス・バレスを破って当選しているが、1906年の総選挙には選挙の途中で出馬を辞退した。1907年にクレマンソー内閣の外務大臣ステファン・ピションに全権大使に任命され、1909年にギリシア大使としてアテネに赴任した。第１次世界大戦が始まり協商国支持と同盟国支持で国論が分裂していたギリシアで一方の協商国支持の自由党党首ヴェニゼロス VENIZELOS 支持演説をして反対陣営の反撃を受け、本国召喚され外交官としての政治生命も終わりを遂げた。その後政治には関与せず、隠遁生活を送る。[24]

ドゥヴィルは彼が歩んだ政治的遍歴の多様性や彼の思想の複雑性・多面性からして、一つの党派の理論家として組織的枠組みに拘束され、党派的利害を背負って生きるタイプの活動家では決してなかったことが理解できる。この大会で社会党右派にも内在した硬直した教条主義への怒りにも似た批判をしたのち、彼は社会党統一には背を向けたのであった。

本論に戻ろう。ドゥヴィルについでルノーデルが発言する。彼は党の政治綱領が「諸原理の宣言」と「最小限綱領」に分かれていて、彼は前者を中心に議論を集中させるとして修正案を提出した。その修正案の共同署名をしたのはセーヌ-エ-オワーズ県連合、オワーズ県連合、ノール県連合、パ-ド-カレー県連合、ニエーヴル県連合、エーヌ県連合、ヨンヌ県連合、少数派セーヌ県連合、そして彼が代表するセーヌ-アンフェリウール県連合の９つの自律県連合と独立派社会主義者の革命的社会主義連合の10組織であった。

ルノーデルはドゥヴィルの遠慮したテーゼよりも容赦のない全体委員会の報告に真っ向から反対するテーゼを擁護すると主張する。綱領を構成する「諸原理の宣言」と「最小限綱領」の二つの部分のうち、「最小限綱領」

を無視するではなく、別個の議論を行うと表明した上で、最初は「諸原理の宣言」を扱い、次に「最小限綱領」を多くの点を批判すると述べた。前者は「軍事問題」「政治問題」「労働立法」と分けられて正しく順序づけられていない全体委員会の案と、より明確に分類した彼らの修正案は全く異なっていると主張する。

彼らの修正案は２つの部分から成り立っており、社会科学の確認である第１部は現存するブルジョア社会の検証である、第２部は特に社会主義の目的とその手段を明らかにした。

そして全体委員会の「宣言」は示された理念の間に十分なつながりがなく、冗漫であると批判した。それに対して修正案は「社会主義は生産手段と交易手段の社会化 socialisation によって、集産主義的 collectiviste で共産主義的な社会の樹立を目的として提起する[25]」そして機械化が将来社会において労働者の福利の一要素になると力説する。さらにジョレースが小商業、小生産、小企業が大商工業制と大農業所有制と共存すると言っているが、実際には絶対的従属制が存在すると、さらに小農地所有制は機械化が阻まれ、抵当権のもとにおかれるとルノーデルは反論する[26]。

小商人、小工場主は競争によって没落し、小土地所有農民は生産物の価格低下と抵当権の蔓延によって没落するので共同化の利点を理解し、小商店主、小作業場、小農地の社会化を自らもとめるのであることを大衆に理解させるべきであると説く。すなわち小商人、小企業家、小農業経営者は、大商工業に対して用いられる容赦のない収奪によって消滅するのではなく、彼ら自身が階級として生存する手段を失って、集産主義的社会のなかへと消滅するのであると説明する義務をもっていると彼は主張する[27]。

市場経済に反対し、計画経済を対置する将来のルノーデルの「ネオ・ソシアリスト」の一端をここに垣間見ることが出来る。

またルノーデルは手段の順番についても修正する必要があると言い、全体委員会の綱領のように公共権力の支配と経済的組織の支配を分けて説明するのではなく、これらの組織的構成体を一つとして考えるべきだという

のである。[28]

さらに彼は、一人の社会主義者個人がブルジョア政権への入閣を通常の政治権力支配の始まりとしてではなく、余儀なくされた過渡的例外的な便宜手段とみなすべきであると言う。[29]

さらに彼が、敵階級からプロレタリアートの境遇を改善し最終的な解放への途をひらく諸改良をもぎ取るとしても、現在の社会を合法的で平和的に共産主義社会に完全に移行させることを保障するのに十分であると信じることには誇張がある、資本主義社会の強硬な抵抗を断ち切るプロレタリアートの究極的努力によってしか期待できないと言うと、ドゥヴィルから「どんな性格の努力か」と弥次られる。ドゥヴィルの不規則発言をルノーデルはたしなめたが、ドゥヴィルは彼が反対する暴力的革命か否かを訊きたかったのである。[30]

ルノーデルはゼネラル・ストライキをその一例として持ち出し、主唱者ブリアンの名前も口にする。またこの時点ではルノーデルに限らずドゥヴィルの発言への配慮が発言者に見ることが出来る。改良主義を旗印にしたフランス社会党右派 PSF にとってドゥヴィルのような理論家は無視できない存在であった。

ドゥヴィルが前に持ち出した軍事費を全廃する問題も、ルノーデルは現体制においては難しい問題であると発言している。　そして発言の最後に社会主義諸勢力の統一の問題を綱領に掲げられていないことに疑問を呈して発言を締めくくった。

次の発言者は元アルマーヌ派のアルベール-プラン ALBERT-POUAIN[31] であった。綱領案にある大統領と元老院の廃止は当座に実施される綱領ではなく最大限綱領であることを考慮して欲しいと糾す。司法の無料化を支持し、軍事法廷ならびに軍隊内の司法制度を批判する。また原則と戦術を混同しないためにゼネラル・ストライキという語を原則ではなく戦術であるからして綱領に入れないことを要望し、彼の発言を終える。

次にラクール LACOUR[32] が発言する。まず彼はドゥヴィルの批判から始

める。原案では離婚法の改正を謳っただけであってその内容が明記されていないという、ドゥヴィルの当然の指摘をラクールは問題とする。さらに８時間労働制についても、少年の労働時間半減について今は８時間労働制ではないので具体的労働時間を示せとドゥヴィルが言っているのであるが、見当違いの批判をする。一事が万事、原案の文面もドゥヴィルの批判も正確に理解していない。あまつさえ大統領制と元老院の廃止はガンベッタのベルヴィル綱領に書いてあると信じられない発言をする。ついにはドゥヴィルを指しているのであろうが、私はリセを出ている人のような風には話せないと弁解する。勿論、ルクールのような支離滅裂な発言をする弁士ばかりではないが、ゲード派とヴァイアン派が抜けた社会党右派の大会では論戦の緊張が失せた観がある。

大会の議論はもっぱらフランス社会党右派 PSF の政治綱領である「諸原則の宣言」と「政治綱領・経済綱領」(最終的には「諸改良の綱領 Programme des réformes」にまとめられる）への議論に終始し、いまだ統一を果たしていないフランス社会党がフランス社会主義運動全体のなかでどのような政治方針・政治路線を採るべきかの議論がほとんど欠落しているのである。そしてフランス社会主義諸組織が統一の直前で分裂をもたらしたミルラン入閣問題について、ヴァルデクールソー内閣がコンブ内閣に政治の主舞台を譲り渡しミルランが大臣を辞めて右傾化し、社会党右派を離脱しかかったこの大会の時点でも、真剣な入閣問題についての討論を総括が全くといって良いほど見ることが出来ない。ちなみにミルランはこの大会に出席していなし、出席しなくなって久しいのである。(33)

ルクールの発言のあとに議長はルノーデル提案を採決にかけるが否決される。

ルノーデル案採決の後に発言するのはセーヌ県の代議士バニョルBAGNOL(34)である。まず社会党議員が議会では地方の取るに足らない利益を主張して、社会主義の大きな理念を忘れていると批判する。農民への働きかけが重要であると強調する。そして彼は政治綱領からこの革命という語を消しては

ならない、この語こそブルジョア政党や急進党と区別するのに必要であると主張する。議会で労働委員会に所属するさらに彼は1898年の労働災害についての法について語り、労働災害について法廷であらそう場合の弁護士費用の国家負担についても論じた。最後に要求を実現するためのゼネラル・ストライキルはユートピアであるにしても、必要なユートピアであり、綱領に「革命的」と「ゼネラル・ストライキ」という語は保持するべきだと述べ、発言を締めくくった。[35]

バニョルに引き続きレヴラン REVLIN[36]が発言する。最初に彼はドゥヴィルとルノーデルの批判に反論すると宣言する。彼はドゥヴィルが軍事予算を認めているとして批判する。駐屯地駐留民兵が設立されていない限り軍事予算に賛成投票をするべきではないという。批判は８時間労働制や教育・学校問題にもおよぶが、枝葉末節の議論で本質的議論は見ることが出来ない。ついには当面の要求については「木を見て森を見ない」となるので、後日議論をした方が良いという結論に行き着く。ドゥヴィルは1789年の人権宣言と結びつけて観ようとしているが、人権宣言で言う所有とは私的所有であって、共産主義的所有はバブーフの「平等者の宣言」に始まると言ってって、ドゥヴィルの批判を受ける。ドゥヴィルは「宣言」がバブーフのものであるあるだけではなく、彼は却けようとしたものだとの反論を受ける。最もドゥヴィルは社会主義とフランス革命の関係を重視しようとしたが、バブーフについては触れていないのである。[37]ドゥヴィルは全体委員会が社会は敵対する２つの階級に分裂すると言っていることについて、それは確定した事実ではなく趨勢であると批判しているが全体委員会案はほかの諸階級にも触れており、階級の分裂は進行中の事実であると言って批判する。[38]返す刀でルノーデル案を批判する。そしてノーデルの修正案をスコラ的でドグマ的であると非難し、一方で原案である全体委員会案は社会の経済的発展をよく説明しており、現実的であるとして賞賛する。全体委員会案は階級闘争についても、国際主義についても、生産・交易手段の社会化についてもよく作られており、軍事費についても反対していることを

強調する。

これに対しルノーデル案はゼネラル・ストライキだけが存在理由であるが、ブリアンのゼネラル・ストライキの提案は否定されていると述べた時、ブリアンは自分の方針ではないと猛然と抗議する。ルヴランは言い換えて、革命的社会主義労働者党（＝アルマーヌ派）の主張であるとする。ブリアンは納得する。ルヴランはゼネラル・ストライキには平和的なもの、暴力的なもの、経済的なものといろいろあるが、実現した例はないと力説する。そして王権の強い抵抗があったから成功するフランス革命時の蜂起になぞらえる。そして部分的ストライキの広がりがゼネラル・ストライキの成否がかかっていると指摘する。[39]

つぎに綱領委員会選出の時期について議論され、現在は審議を続け選出は翌朝ではなくこの日の審議終了後におこなうことで合意が出来る。

そのつぎにブリアン BRIAND[40] が発言する。これまでの演説とは違いかなり明晰な内容の演説である。彼はドゥヴィルが革命的という語にはっきりとした正確な定義を与えるというのに賛同して言う。「革命派必ずしも暴力的なものではない。暴力的なものになるのは、つねに反革命によってなるのである。我々は原則でも真意でも暴力的ではない。当然のこと我々の理想を実現するために極端な手段に頼ることをのぞまない。しかしある時点で暴力的手段に追いつめられないように、反革命の抵抗を用心しなければならない[41]」とブリアンは述べ、革命的という語を限定した。歴史のページをめくり、中世都市の自治特許状の獲得からはじめ、最後に1871年のコミューンをあげ、これが共和政を創り上げたと指摘する。そのあとでブリアンはゼネラル・ストライキについての議論を始める。ベルギーでは選挙制度改革でゼネラル・ストライキが成功したし、ジャッピー大会ではゼネラル・ストライキの方針はすでに採択されているとして、この戦術についての議論をこれ以上長引かせたくないとした。議論を事実上回避したのである。

セーヌ県連合の代表が発言したあとで、ヨンヌ県連合のエルヴェが発言

するが、ながながと愛国主義の歴史上での展開を述べその罠と危険性についてたあとで、植民地戦争の放棄、復讐的戦争の放棄、調停による紛争の解決を最小限綱領にかかげるべきであると提案した。

大会初日の最後を締めくくったのはジョーレスのきわめて長い、この日の議論全体を総括するような演説[42]であった。その主旨を簡略にまとめてみよう。

彼はフランス革命、それも人権宣言の問題から演説を始める。人権宣言はブルジョア的であっても民主的であり、それが民主主義のロジックで93年憲法からバブーフへと行き着いたという。半世紀前の労働者の悲惨な境遇が改善されてきたのは社会主義があったからである。普通選挙が実現し、改良的手段が成果を上げてきた。資本主義の側が力を持ちそれによる抵抗があり得ないとは言えないが、イギリスでもドイツでの力によらず普通選挙を実現してきた。合法的に労働組合を作ったり、合法的にゼネラル・ストライキをすることさえ出来る。しかし一部の似非革命派は暴力的ゼネラル・ストライキを唯一の手段と描き出し、合法的で平和的なゼネラル・ストライキから目を向けさせないと批判する。そして軍事問題については、軍事予算を否定することと常備軍に代えて民兵団をもとめることは矛盾しないという。さらにゼネラル・ストライキの方針は表に掲げるべきではないとジョレースは主張する。入閣問題については党全体の同意が必要であり、個人的には新たに入閣するのは大きな誤りであると述べている。入閣問題についてのジョレースのこの発言は、ミルラン入閣後の長期の経験を踏まえて行き着いた結論として注目に値する。

大会初日を閉じる前に，議長は15人からなる綱領委員会選出を提案し、認められた。既定の名簿とジョレースたちが選んだ２つの候補者名簿が提出された。まずは両名簿に共通して名前が挙がっている７人を選考する。

その７名とはブリアン、ドゥヴィル、エッパネメル HEPPENHEIMER、ジョレース、プラン、レヴラン、ルアネである。さらにブリアン、ドゥヴィル、エッパネメル、ジョレース、プラン、レヴラン、ルアネである。こ

の７人に加えて第１の名簿に名前が挙がっていた８名を追加することにして、議場に諮られた。

その８名とは議長のボンヌヴィアル、カバルドス CABARDOS、アムラン、エルヴェ、イヴ・ル・フェーヴル、マルティネ、ルノーデル、ヴェルディエ VERDIER である。８人が追加され、15名で委員会を構成することが決まった。

大会初日は午前２時45分に閉幕された。

第２章　フランス社会党Ｐ第４回トゥール全体大会第２日

はじめに

前日の会議が長引いたために、この日の第２日月曜日第１回全体会議は３月２日の午後２時30分に開始された。２日目の議長にはヴィヴィアニ VIVIANI が選出された。副議長はネルソン NELSON とカメル CAMELLE、ソモノー SAUMONEAU の３名が、書記にはトレムレ TREMOULET が選ばれた。

第１節　３月２日月曜日第２日第１回全体会議

議長は最初の議事日程を急遽変更して、審議中の政治綱領を審議にかけると告げた。最初にセーヌ県連合の報告を審議にかけるべきか、定期刊行物委員会 la commission de la presse の報告を審議にかけるべきかが議論され、後者の報告が審議されることになった。

定期刊行物委員会の報告はオリ ORRY から行われた。

長文にわたるこの報告を要約すれば以下の通りである。

リヨン大会で日刊の機関紙を党が持つことが動議で決定された。そのためにオリとモリゼ MORIZET に近隣諸国とフランスの党機関誌の実情を調査させた。しかし刊行する主体の協同組合がフランスでは殆どなく、定期購読する意識も低いためにフランスでは実現が、そして収支を均衡させることが困難であると判明した。製版・印刷、編集者への報酬等の見積も

りを出すと、現実的発行部数は数千部であると、しかし資本は50万フランほど必要であると判断された。そのためには出資金を募る金庫が必要であった。これらの障害から機関紙創刊は数年の募金を募らなければ不可能であると結論された。[43]

討論に入ると、現役のジャーナリスト、特に「プティト・レピュブリーク」紙のジェロー−リシャール GÉRAULT-RICHARD から現場の実情からかけ離れている、最初から多くの専任の編集者を多人数置けないし必要ない、コラム記者などに依頼し、最初は月刊か週刊でよい、最初から多くの紙面数や部数の発行をのぞまずに開始するべきだと批判された。[44] 協同組合で機関紙を経営するべきか、募金に頼るべきか揉めたあとで、採決の結果まずは週刊でも月刊でもなくただ機関紙を持つことを決めただけであった。

ついでオリの提案で日刊か週刊かは先送りすることが採決された。不毛な議論を繰り返しただけであった。募金によるか資本金によるかは、最終的には採決の結果全体委員会に一任することになった。[45]

つぎに議員団 groupe parlementaire の報告がドゥヴェズによって行われた。長文のこの報告も以下に要約する。

リヨン大会の分裂は議員団の分裂をも引き起こした。ゼヴァエスがいくつかトラブルを引き起こしたが1901年２月８日の結社法の票決に際してはゼヴァエスが修道会を全廃するという修正案を取り下げ、その後は議員間の信頼が回復された。その後元老院で修正された機関士・機関助士についての法案や鉄道買収法案、鉱山の労働日についての法案で意見不一致がおきたが解決され、意見の一致を見た。議会での行動における２つの原則は共和主義的理念と社会主義的理念の緊密な結合とあらゆる改良を即座に実現することと定められた。社会主義と共和政の完全な協調の上に打ち立てられた。多くがユゴーの引用やヘーゲルの弁証法で政治が語られるなど、理念に傾きすぎ、具体性に乏しい。

つぎに議員によるプロパガンダは担当し巡回する地域を地図に書き込むことが義務化されたと報告されている。結論では恒常的情宣活動と緊密に

結びついた議員たちによる一貫した議会活動で、大きな成果を生み出したとある。きわめて観念的・抽象的な報告である。[46]

この報告についての質疑となると、突然世知辛い現実に引き戻される。ルノルマン LENORMAN[47]はこの報告について「何人かの議員は優秀なプロパガンダの担い手となっているが、しかし払われた努力はもとめられている高さに達していない。ドゥヴェーズ氏のすばらしい報告にはたくさんの影の部分がある[48]」と皮肉っている。そしてジュールド JOURDE[49]などは党のプロパガンダ活動をまったく行わない、アジア派兵予算にも賛成したと非難する。他の発言者たちも同様に彼やカルヴィニャック、クロヴィス・ユーグたちを非難し、アルマーヌなどの勤勉な議員を賞賛した。その後いくつかの質疑と発言ののちに議員団報告は満場一致で可決された。セーヌ県連合の短い報告と了承の後に、予定より遅れて、午後６時に第１回全体会議は終了した。議長から第２回全体会議の開始は午後８時半を予定していると告げられた。

第２節　３月２日月曜日第２日第２回全体会議

第２日目の第２回全体会議は夕刻の９時に始められた。最初に政治綱領委員会の成案がジョレースから報告された。全委員により綿密に検討された文案であると説明された。

文面は前日の討議を経て大幅に修正された。原案にはなかったフランス革命からの継承について特に、人権宣言で謳われた自由・所有・安全 sûreté をバブーフが目指した共産主義によって大幅に修正されブルジョア的民主主義は共産主義的民主主義へ発展させられることを明文化した。理念と思想の世界について目指すものも具体的かつ詳細に文案化された。

「社会党は新しい社会を構成するために迷信と偏見から解放された自由な精神をのぞむ。社会党は人類全体とすべての個人のために、そして彼らのために思想と出版と彼らの信条を保障することをのぞむ。あらゆる宗教、あらゆるドグマ、あらゆる教会そしてブルジョアジーの階級的なものの見

方に自由な思想と科学的世界観、ひたすら科学と理性に根拠を置く公教育制度を対置する[50]」と「諸原則の宣言」に文章化された。

小生産者に対する社会党の政策もより詳細に説明された。国際平和と戦争の脅威に対しても同時的軍縮をおこなうこと常備軍を民兵団に改編することが謳われた[51]。

そして文末に社会党の行動規則と行動目的を次のようにまとめた。

「労働者の国際的協調。権力を獲得するためと生産・交易手段の社会化、すなわち資本主義社会を集産的社会あるいは共産的社会に移行させるべく、プロレタリアートの階級政党への政治的経済的組織化。」

議長が採決をもとめるなかで、大会参加者は立ち上がり、全体一致で「諸原則の宣言」を採択する。

またブリアンの提案により入閣問題について「党大会が変更しない限り、次の議会任期からはいかなる社会党員も内閣の大臣 la combinaison ministérielle に入閣しない」と言う決議案が採択された。

最小限綱領につて議長から報告を求められたジョレースは、翌朝に最小限綱領について完成させるために集まるのが、出来るだけ早く報告を提出したいので今夜にも作成したいと返答した。

最後に議論になるのは、シャラント-インフェリウル＝ヴァンデ県自律連合のティゾン THIZON から出された自律県連合の加入を認めたことに伴い、連合的統一を定める社会党基本党規則 constitution の改正をもとめられ、ブリアンは５条からなる以下のような私案を提出する。

第１条　社会党は連合的統一として構成される。

第２条　党は互いに連合間委員会 comité interfédérale によって結びつく自律県連合あるいは自律地域連合によって構成される。

第３条　連合間委員会の権限は、厳密に管理と組織化とプロパガンダ（情宣活動）に限定される。

第４条　議員への統制は連合によって採択された綱領を基礎に行使される。連合間委員会が統制の件について付託された場合、純粋

かつ単純に当該の連合に移送しなければ（差し戻さなければ）ならない。全国大会が最終的審判者となる。

第５条　リヨン大会で採択された党の基本規則に反する条項は廃案となりかつ廃案のままにとどまる。

このブリアンの私案には賛否両論が出され、紛糾のすえ委員会に付託された。

このあと第２回全体会議は終了し、議長は翌日２時から再開すると宣言した。

第３章　フランス社会党 Parti socialiste français 第４回トゥール全体大会第３日

はじめに

第３日目は最終日であり「最小限綱領」の審議に割り当てられる。

第１節　３月３日火曜日第３日第１回全体会議

第３日目の議長はジェロー–リシャール、副議長はバレ BALLET とフルニエ、書記はトレムレが選出された。

最初に次回の開催都市についての議論が行われ、ルーアン、マルセイユ、ボルドーなどが推薦される。交通の利便性やカトリック派の強固な地盤であるから地元で情宣活動を行ってほしいなどいろいろ議論されたが、自分の所在地に近いからという理由まで出され、採決方法までがあらそわれ、議論百出、結論はなかなか出ない。結局評決の結果ボルドー81票、ルーアン52票、ランス Lens19票でボルドーに決定した[52]。会議はなかなか進まない。その理由もわからないではない。

日程は次回インターナショナル大会がアムステルダムで開かれる前後の、1903年８月か９月に３票をのぞく全体一致で可決された[53]。しかしあとになってわかることだが、ドイツの選挙と重なるという理由で、アムステルダ

ム大会は1904年に延期される。しかしボルドーでの社会党大会は1903年に開催される。

おまけにリヨン大会に提案されたがいまだ確定的決議がなされていないと言う理由で、社会党員は叙勲を一切受けてはならないという動議が出され、動議への署名者からも動議案の修正案が出され、延々と議論が終わらない。社会党左派と分裂して手強い論敵を失って緊張感が失せたとしか考えられない大会の状況であった。ようやくこんな矮小な問題を時間を浪費することを批判する意見がロジエ ROZIER から出され、賛同を受ける。最終的には同じロジエが話をまとめるためにレジオンドヌールや軍の叙勲など禁止される叙勲を限定したうえで、全体一致で採択される。(54)

叙勲問題が終わると除名処分問題が持ち上がる。ティゾン党統制委員がモロー MOREAU というパリ市市議会議員の除名をもとめた。モローはある労働者を解雇するように上司にもとめたというのである。しかし彼は社会党を辞めたということだったが除名が可決される。

一難去ってまた一難、今度はジュールドら 6 名の社会党議員が中国に派遣される軍を祝賀した件について処分するべきであるとティゾン統制委員は言い出すが、処分権は全体委員会になく、県連合にあると言うことがわかり、この制度自体をティゾンは問題にしようとする。しかし議員が所属する県連合のなかには議員を擁護する県連合もあった。またクロース議員は大会に出席していて、彼も他の社会党議員たちも軍事費予算に賛成していないと反論した。ただし遠征艦隊を祝賀したのは艦隊の若い兵士まで非難することが出来なかったからであると自己弁護した。そして内密に県連合から処分は受けていることを明らかにした。(55) 最終的に議員たちがとった行動はヴィヴィアニらの弁護もあって不問に付された。

綱領委員会は 9 時に「最小限綱領」についての成案を提出する予定なので、 8 時半に会議を再開すると告げて、 6 時 5 分に第 1 回全体会議を終了した。(56)

第２節　３月３日火曜日第３日第２回全体会議

予定通り第２回全体会議は開催され、議長はジェロー－リシャールが続けて務めた。最初に党規約 les statutsdu Parti を改正するための委員会を代表するフルニエに報告を求めた。リヨン大会では予定されていなかった自律県連合が大挙して党に加入したために、自律県連合に大幅に自律を認める内容の党規約となった。

「第Ⅲ節　全国党大会」では、１県連合から１名の代議員がみとめられ、複数の県にまたがる県連合は県ごとに代議員が認められた。さらに党費納入党員100名までは１代議員、100以上300までは２代議員、300から500までは３代議員が認められた。さらに県での選挙の得票数2000から7000までは１代議員、7000から15000までは２名の代議員、15000から30000までは３代議員を、さらに超過分は15000ごと３代議員を増加させて、全国党大会に送ることが出来、１代議員につき３委任まで認められるとした。

「第Ⅳ節　連合間委員会」では全国大会代議員１名から10名につき１連合間委員、10代議員から20代議員につき２代議員、20代議員から30代議員につき３代議員を、さらに超過分は10代議員ごと１代議員を連合間委員会に送ることができるとした。また社会党に加入する連合は１代議員を次の大会から送れるようにした。さらに25議員ごとに１連合間委員が組織間の協調と共同行動のためにみとめられた。プロパガンダ（情宣活動）についても人選を含めて任せられた。その他「第Ⅴ節　議員団」、「付加条項　統制」が付加・改正された。[57]

党費納入党員数だけでなく選挙時の得票に比例させて代議員を選ぶ条項については、ルノーデルから批判があった。[58] クローゼル CLAUZEL からはアルコーリズム（アルコール依存症）との闘いを党規約に掲げるべきだとの意見も出された。[59]

最後に、予定されていた「最小限綱領」最終案についての報告がルアネによって行われた。

「最小限綱領」の原案が「政治綱領」と「経済綱領」からなっていたの

に対し、最終案は「Ⅰ政治権力の民主化」「Ⅱ国家の完全世俗化」「Ⅲ司法の民主的で人道的な編成」「Ⅳ個人的諸権利に家族の構築」「Ⅴ人間的世俗的職業的教育」「Ⅵ社会連帯の意味での租税制度の全面的再編」「Ⅶ工業、商業、農業おける労働の法的保護と規制」「Ⅷ自然的経済的災害に対する社会的保障」「Ⅸ国家・県・市町村の工業と農業の土地財産と公共サービスの拡大」「Ⅹ国際平和と軍事組織の国家防衛への適応」の10の節に整理された。

おもな改正点と新しい項目の付加についてみれば、「Ⅰ政治権力の民主化」については国民発議とレファレンダム（国民投票）、リコール制が追加された。「Ⅱ国家の完全世俗化」については新しい追加項目はなかった。「Ⅲ司法の民主的で人道的な編成」では現刑法の応報的制裁的性格を受刑者の保護的矯正的性格に変えることや死刑の廃止が加えられた。「Ⅳ個人的諸権利に家族の構築」は離婚制度の改正をより「リベラルな立法化」と変更された。「Ⅴ人間的世俗的職業的教育」は教育の無償化と聖職者による教育の禁止が追加された。「Ⅵ社会連帯の意味での租税制度の全面的再編」はこの節が新しく追加され、生活必需品への課税禁止と累進制所得税の制定などの要求が明記された。「Ⅶ工業、商業、農業おける労働の法的保護と規制」では最低賃金制についてもとめた。「Ⅷ自然的経済的災害に対する社会的保障」では社会保障制度への労働者の参加が謳われた。「Ⅸ国家・県・市町村の工業と農業の土地財産と公共サービスの拡大」では労働取引所と労働者組織が協力する職業斡旋制度が政策化された。また農業への融資、農家への農機具、農地購入のための補助金などが政策として掲げられた。「Ⅹ国際平和と軍事組織の国家防衛への適応」では刑罰としての兵役延長の禁止、侵略戦争と植民地への軍派遣の放棄などが綱領化された。[60]

次に質疑に入ったが、ヴィユ VIEU は医療についての項目が欠落していると指摘したが、ルアネが保健衛生・医療・薬局のついて社会サービスが明記されているとの返答を得て、質問者は納得した。

最終的に最小限綱領の部分の政治綱領は大会で可決・採択された。最後に議長の締めくくりの挨拶があり、「国際社会主義万歳」と唱えられ、拍手喝采のうちに「インターナショナル」が唱和されて３日間にわたるフランス社会党トゥール大会の幕が降ろされた。

結びに代えて

この大会の後1903年にはボルドー大会が、1904年にはサン－テティエンヌ大会が、最後にそして統一社会党結成の前にルーアン大会が開催されているが、これらの大会の議事録は存在していない[61]。トゥール大会でほぼ社会党右派の重要問題が決定さたので、これら後に続く３回の党大会がさほどの重要性を持たなかったという理由で議事録が残されなかったのかもしてない。統一社会党はこの社会党右派の組織構造が全面的に変えられて、アムステルダム大会での「ドレスデン決議」に従いドイツ社会民主党のような中央集権的党に再編され、議員団は党中央組織である常任執行委員会 CAP の統制のもとにおかれ、ミルラン入閣のような「ブルジョア政権」への入閣は不可能となる。大臣として入閣をのぞむ社会党議員はブリアンやヴィヴィアニのように統一社会党 SFIO を離脱して、社会主義共和派の議員として活動を行った。しかしやがて第１次世界大戦が開戦して挙国一致に「神聖連合」が結成されると、ゲードやサンバが入閣する。それまではカイヨー内閣に対するジョレースのように現実主義的社会党議員は野党の立場で陰に陽に政権を支えることが出来たに過ぎなかった。

統一社会党の「左翼ブロック」からの離脱は、第１次世界大戦前夜のフランス政治にいかなる影響をもたらしたかは、歴史には仮定が不可能であるからして、一言でその得失の収支決算を行うことは困難である。しかしカイヨーなどの統一社会党に近かった急進社会党と社会党の連立が行われた場合、迫り来る戦争の脅威と対抗できたかも考慮するに値するし、「幻のカイヨー－ジョレース内閣」につて議論する歴史家[62]もいるが、最後にいえるのは、歴史は一回性のもので、歴史に仮定を差し挟むことは出来ない

という結論に行き着くのである。

註

（１） WILLARD Claude ; *Le movement socialiste en France. Les Guesdistes.* Paris, Éditions sociales. 1965, pp.382, 384

（２） *Ibid.,* p.537

（３） Aaron NOLAND ; *The Founding of the French Socialist Party.* Oxford. Harverd University Press. 1956, pp.138-139

（４） *Quatrième congrès général du Parti Socialiste français, tenu à Tours du 2 au 4 mars 1902. Compte rendu sténographique officiel.* Paris. Société nouvelle de Librairie et d'Éditions. 1902 p.XVII,

（５） *Ibidem,* p.XVIII

（６） *Troisième congrès des organisations socialiste français, tenu à Lyon du 26 au 28 mai 1901. Compte rendu sténographique.* Officiel, Paris Société nouvelle de Librairieet d'Édition（Librairie Georges Bellais), 1901, p.384

（７） WILLARD ; *Les Guesdistes.op.cit*., Septième Partie, Le Parti Socialiste de France. Chapitre XVIII L'organisation du Parti Socialiste de France. pp.537-547

（８） いろいろな地名が出されたが、無名の報告者である一代議員の提案をルーアネ ROUANET 代議士が支持し、議長が採決させたからであるというのが、党大会開催の都市がトゥールに決定した真相である。cf. *Troisième congrès des organisations socialiste français, Compte rendu sténographique. op.cit.,* pp.453-454トゥールはフランス共産党生誕の地であるが、フランス国鉄のターミナル駅があるサン－ピエール－デ－コール Saint-Pierre-des-Corps が鉄道労働運動の拠点であったことが1920年に社共に分裂する社会党大会が開かれた背景にある。

（９） クロゼル、CLAUZEL、名前は不詳。パリ第 XIII 区の独立社会主義派活動家。トゥール大会にはヴォクリューズ県連合と海外領土のガドループ、マルチニーク県連合の代議員として出席した。MAITRON, Jean (sous la direction de) ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. Troisième partie ： 1871-1914*. Tome

11. Paris. Les Éditions ouvrières. p.213

(10)　ルノー、エリザベート RENAUD, Elisabeth、小学校教師。1914年の開戦の前にエリザベートはフェミニストと社会主義運動の女性活動家であった。ゲード派の著名なフェミニスト活動家アリス・ヴァレット Aline VALETTE（1850年－1899年）が肺結核で死去したあと、ルイズ・ソモノ Louise SAUMONEAU とともに社会主義フェミニストグループを組織した。1910年総選挙では無効を覚悟してイゼール県ヴィエンヌ第 2 区に立候補し、2869票を獲得した。1912年のパリ市議選にもオデオン地区（第Ⅵ区）から立候補した。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op.cit.,* t.15, p.28

(11)　不詳。

(12)　RÉVEILLARD, Jules、レヴェリァル、ジュール。メーヌ－エ－ロワール県の弁護士。ジャッピー大会の頃はヴァイアン派に属していたが、1904年には、そしておそらくは 2 年前のトゥール大会の頃からフランス社会党右派 PSF に加入していた。社会党統一に参加した。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op.cit.,* t.15, p.35

(13)　ボヌヴィアル、マリ、BONNEVIAL、Marie。小学校教師。フェミニスト、労働組合、社会主義活動家。*Ibid.,* t.10, p332.

(14)　ルノーデル、ピエール、RENAUDEL, Pierre.（1871年－1935年）獣医であった彼は、この職業を本業とせず、代議士になるまではジャーナリストとして生計を立てた。最初ブランキ派に加入し、リヨン大会でブランキ派が分裂した後も、フランス社会党右派 PSF にとどまり同党の最左派となった。統一社会党に参加し、党中央執行部の常任執行委員会 Commission administarative permanent に選出され、「リュマニテ l'Humanité」紙の編集部に入り、 世界大戦までの全党大会に参加した。総選挙では落選を重ねたが、ようやく1914年の総選挙でトゥロン第 3 区から当選した。大戦中は神聖連合支持の多数派に属した。1920年の社共に分裂するトゥール大会では社会党にとどまったが、彼を含む少数右派は「ネオ・ソシアリスト」グループを形成したが、同派の議員 7 名は1933年に党を除名される。*Ibid.,* t.15, pp. 29-30

(15)　エルヴェ、ギュスタヴ、HÉRVÉ, Gustave（1871年－1944年）。ブレスト生まれのエルヴェはブルトン人特有の激越な性格を特徴とし、社会党における徹底した反愛国主義・反軍国主義の、 極左派の旗手となった。 1897年に教授資格を取得し、ヨンヌ県のリセの教授となった。1905年には弁護士となる。最初アルマーヌ派に属し、フランス社会党右派 PSF に極左派として地歩を築き、社会党左派に移り、社会党統一に参加し、常任執行委員会 CAP に選出された。祖国防衛を否定し、戦争の開戦に対し蜂起とゼネラル・ストライキで対抗すると主張した。彼の新聞『社会戦争 Guerre sociale』は社会党極左派の根城となった。しかし1911年のアガディール事件後に穏健化し、与党への入閣を主張した。第 1 次大戦開戦後は戦争に協力し、偏狭な熱狂的愛国者となり、社会党から除名された。*Ibid.,* t.13, pp.47-53

(16)　ブリュネリエル、シャルル、BRUNELLIÈRE, Charles。1847年－1917年。生没ともナント市。富裕な商家に生まれ、兄弟と帆船艤装業会社を設立したが、行き詰まり事業をたたんだ。フランス労働党 POF に入党し、1896年にはナント市議に選出された。ジャッピー大会ではゲード派の提案に反対し、ジョレース派の社会党右派 PSF に合流するが、統一党の妨げにならないよう、同党から彼のブルターニュ連合は離脱して完全自律連合となる。また彼はゲードへの同調から彼単独で社会党左派 PSDF に入党した。こうした複雑ないきさつがこの大会で問題となった。 1905年統一社会党結成に参加し、 新党規約に従って同連合を県連合に改組し、1908年にはロワール－アンフェリウル県連合を設立してその書記となった。1914年頃彼は重病を患い、1917年に脳溢血で死去した。Claude WILLARD ; *La correspondance de Charles Brunellière. Socdialiste nantais. 1880 - 1917*. Paris. Librairie C.Klincksieck. 1968. pp. 7－23

(17)　ルフェーヴル、イヴ LE FEVRE、Yves（1874年－1959年）治安判事。アミアン控訴院裁判官。ブルターニュ地方の古い貴族の家に生まれたルフェーヴルはフランス労働党 POF、社会党右派 PSF を経て、統一社会党に参加した。

(18)　Q*uatrième congrès général du Parti Socialiste français, op.cit.,* pp.11-12

(19)　*Ibid.,* pp.12-14

(20)　アムラン、アルフレド、HAMELIN、Alfred。活字工として労働組合運動に参加していたアムランは製本労働組合連合の改良派のクーフェル KEUFER ではなく、元コミューン参加者の革命派アルマーヌと活動をともにした。社会党活動家としても、社会党統一に参加し、いくつかの選挙に立候補したが当選しなかった。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op.cit.,* t.13, pp.26-27

(21)　ブリアンはこの大会ではノール県２委任とロワール県１委任の３つの委任を受けて大会に代議員として参加した。*Quatrième congrès général du Parti Socialiste français, op.cit.,* p.433　ブリアンの経歴については、本論文の注（40）をみよ。

(22)　*Ibid.,* p.22

(23)　MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op.cit.,* t. 13, p.47

(24)　ドゥヴィルの経歴については *Ibid* .,pp.46-49, WILLARD ; *Les Guesdistes. op.cit.* p. 619, を参照した。

(25)　*Quatrième congrès général du Parti Socialiste français, op.cit.,* p.43

(26)　*Ibid.,* p.60

(27)　*Ibid.,* pp.61-62

(28)　*Ibid.,* p.62

(29)　*Ibid.,* p.63

(30)　*Ibid.,* p.65

(31)　アルベル−プラン、ガエタン、ALBERT-POULAIN, Gaétan,（本名プラン、アルベール POULAIN, Albert）（1866年−1916年）。機械工作労働者。アルデンヌ県の代議士。アンジェに生まれ、パリに出て金属労働者となり、アルマーヌ派に所属してアルデンヌ県に移り、労働組合運動の活動家となった。1898年にメジエール第２選挙区から代議士に当選。1899年のジャッピー大会以降、社会主義勢力の統一のために努力した。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op.cit.,* t.14, pp.301-305

(32)　ラクール、レオン、LACOUR, Léon,　パリ第ⅩⅨ区からポシビリスト＝フランス社会主義労働者連盟 FTSF の代表ヴァグラム大会に代表として送られた。このト

ゥール大会にも参加。名前のイニシャルはＪかも知れない。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op.cit.,* t.13, p.165

(33) ミルランは３年ぶりに姿を現したフランス社会党右派 PSF ボルドー大会で発言し、党に残ることが認められないならば、独立派社会主義者の道を選ぶと発言している。

cf.*Congrès socialiste de Bordeaux, tenu les 12, 13 et 14 avril 1903. dix discours de G. Hervé, Sarraute, Millerand, Jean Jaurès... etc.* Paris, Impr. l'Émancipatrice, 1903, pp. 43-61

(34) バニョル、アンリ、BAGNOL, Henri, （1862年－1905年）日常雑貨製造協同組合創立に加わり、1890年ポシビリストからアルマーヌ派に移った。1902年にパリ第ＸＶ区から代議士に選ばれ、1906年の総選挙でも統一社会党の候補にも選ばれたが、1905年に死去した。

(35) *Quatrième congrès général du Parti Socialiste français, op.cit.,* pp.93-94

(36) レヴラン、ルイ、REVLIN, Louis（1865年－1918年)。サント−バルブ・コレージュの教授。パリの弁護士。マルヌ県とセーヌ県の代議士。社会党統一に参加し、常任執行委員会 CAP のメンバーとなった。

(37) Q*uatirème congrès général du Parti Socialiste français, op.cit.,* pp.97-98

(38) *Ibid.,* p.99

(39) *Ibid.,* pp.110-111

(40) ブリアン、アリスティド BRIAND, Aristide（1862年－1932年）ナントでカフェを経営する両親のもとに生まれた彼は1883年パリに出て、代訴人 avoué になるために法学を学んだ。その後1884年故郷のナントに戻り「ラ・デモクラシー・ドゥ・ルエスト La Démocratie de l'Ouest」紙の記者となる。そこで革命的サンディカリストの理論的指導者 Fernand PELLOUTIER と出会い、彼の影響のもとに「ゼネラル・ストライキ」の理論を形成した。1886年から1892年までサン−ナゼル Saint-Nazaire 裁判所弁護士修習生を務め、1889年の総選挙に立候補したが落選。翌年からナント裁判所の弁護士となった。1893年にパリに出て郊外のポントワズ裁判所の弁護士となる。1883年総選挙、1896年補選、1898年総選挙と立て続けに落選し

た後1902年の総選挙でサン−テティエンヌ Saint-Étienne 第１区から立候補して初当選し、その後もこの選挙区から連続当選を果たした。1905年の統一大会には参加し、次のシャロン大会の１ヶ月後党と党議員団に入ったが、1906年３月14日にサリアン Sarrien 内閣の公教育大臣を引き受けて、党を離れた。その後11回首相となり、長く外相も務めた。MAITRON ； *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op.cit.,* t.11, pp.55-56

(41)　*Quatrième congrès général du Parti Socialiste français, op.cit.,* pp.97-98

(42)　ジョレースの長時間にわたる演説の全文は *Ibid*., pp.13-163を見よ。

(43)　*Ibid.,* pp.171-180

(44)　*Ibid.,* pp.171-182-188

(45)　*Ibid.,* pp.204-205

(46)　*Ibid.,* pp.205-222

(47)　ルノルマン、アドルフ、LENORMAND, Adolphe（1861年－1910年）。理髪労働者組合を創立。ポシビリストからアルマーヌ派に移った。遅れて学び直し外科医・歯科医になった。1894年アルマーヌ派（革命的社会主義労働者党）の書記局に入る。ヨンヌ県でも活動を開始し、同県サンスにも歯科医院を開設した。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op.cit.,* t.14, pp.301-305

(48)　*Quatrième congrès général du Parti Socialiste français, op.cit.,* p.223

(49)　ジュールド、アントワーヌ、JOURDE, Antoine（1848年－1923年）裕福な商業経営者であった彼は、1879年の選挙でのブランキのために選挙活動を行い、ブーランジェ運動にも関与して同派の候補者として1889年の総選挙でボルドー第３区から当選した。運動が凋落するとゲード派に加入して同派の候補として1893年の総選挙で代議士に当選。その後アルマーヌ派に接近するが離脱し、1898年総選挙ではゲード派として代議士に当選。ミルラン入閣問題が生じた後はフランス社会党右派 PSF に加入したが1902年の総選挙で落選。社会党の統一には参加せず、1906年の総選挙では当選した。1910年の総選挙落選のあと政界を退いた。MAITRON ; *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français. op.cit.,* t.13, pp.133-134

(50)　*Quatrième congrès général du Parti Socialiste français, op.cit.,* p.251

(51) *Ibid.,* pp.251-252

(52) *Ibid.,* p.285

(53) *Ibid.,* p.286

(54) *Ibid.,* pp.296-297

(55) *Ibid.,* pp.311-313

(56) *Ibid.,* p.326

(57) *Ibid.,* pp.328-331

(58) *Ibid.,* p.335

(59) *Ibid.,* pp.337-351

(60) *Ibid.,* pp.356-362

(61) 但しサン−テティエンヌ大会については「ラ・ルヴュ・ソシアリスト」に50頁ほどの要録が掲載されている。cf. La Revue Socialiste. 1904, pp.317-364またこの大会のルーアネによる議員団報告も35頁の小冊子として出版されている。*Rapport du groupe parlementaire socialiste par Gustave Rouanet.* Paris, P.-V. Stock, 1904, またボルドー大会についてはエルヴェ、ジョレース、ミルランらの10の演説を掲載した小冊子が出されている。

Congrès socialiste de Bordeaux, tenu les 12, 13 et 14 avril 1903, dix discours de G. Hervé, Sarraute, Millerand, Jean Jaurès..etc. op.cit., 170p.この時の 3 年ぶりのミルランの発言は社会主義者の大会での社会主義者としての最後の発言となる。

(62) GOLDBERG, Harvey ; *The Life of Jean Jaurès.* Madison, Milwaukee and London. The University of Wisconsin Press, 1968, pp.424, 426, 449, PAIX-SÉAILLES, Charles ; *Jaurès et Caillaux,* Paris, Figuière, 1920